
ファーストキス

白苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファーストキス

【Nコード】

N1411A

【作者名】

白苑

【あらすじ】

僕は愛する事初めて知った。幼いながらも、子供ながらも。

気づいたときにはもう遅かった。目の前の黒い車が僕の右腕のクリティカルヒットした時だった。信号はちゃんと守ってた。なのにどうして？そんな事を考えながら意識を失った。痛みは不思議と無かった。

次に目を覚ましたのはベットの上だった。白い天井が異様に眩しい。僕は目を開けてまたすぐ瞑る。周りでは久しぶりに聴く両親の声。母親の声は涙声だ。

「自分の名前がわかりますか？」

僕が又目を開けて白衣を着た男の方を向く。おそらくだがここは病院。で、この人は病院の先生だろう。俺はコクンと頷き、

「新藤・・・健・・・」

俺は少し震えながら声をだす。すると、次に先生は紙とペンを差し出してきた。

「ここに名前と歳書いてみて。無理しなくていいからね」

俺は両方受け取り名前を書く。僕の利き手は右手だ。包帯が巻かれているため右手じゃ書けない。なんで右手がこんな状態かは思い出せないけど・・・。仕方が無いので左手で汚い字を書く。書いている途中で目が霞む。なんとか書き終えて、僕は又眠りについた。

次に起きた時にいろいろ説明された。まずは、どうして僕がこんな所に居るかだ。交通事故らしい。そういえば車とぶつかったような気がする。次に怪我の具合だ。右手が複雑骨折、右足が骨折。肋骨も数本折れてるらしい。後、脳震盪だ。車とぶつかったときに右手と右足と肋骨、吹っ飛ばされて地面に付いた時に脳震盪、という事らしい。ぶつかったときの記憶はあまりないが、記憶喪失ではな

いらしい。一瞬の出来事だったので認識できなかったって事だろう。それで、様子見も入れて数週間の間、入院することになった。ちなみに、僕を轢いた人が治療費などを出してくれるらしい。まあ、当然だけどね。

僕が目覚ましてから翌日には、一般病棟に移されていた。僕に割り当てられた場所は窓側。結構嬉しかった。隣には可愛い女の子。年齢は僕と同じ年らしい。

「君、その怪我はどうしたの？」

彼女は僕に少し興味があるらしく、目を輝かせていた。

「交通事故だよ。ちよつと車に轢かれちゃって・・・」

僕は目線を外しながら答える。ちよつと恥ずかしいんだ。

「へえ、私も交通事故だよ。なんか運命を感じるね」

なんて恥ずかしいセリフを言いながらケラケラ笑っている。僕もつられて笑う。彼女の笑いには人を惹きつける魅力がある。僕はそう感じた。

「あ、自己紹介まだだったね。私、橘 明日香。宜しくね」

「僕は新藤 健。宜しく」

二人とも骨折しているから握手はできなかった。

「タケルか、いい名前だね」

「アスカっていうのもいい名前だと思うよ」

「でしょ？私気に入ってるんだ」

彼女はそういうと又笑う。嫌な感じはまったく受けない笑いだ。僕も又つられて笑う。

僕と明日香はよく話した。リハビリの時間以外はほとんど一緒に居た。僕はあんまり話す方じゃないけど、明日香とはよく話した。お互いの家族の事、学校の事、友達の事。恋人はお互い居なかった。僕は明日香に恋人が居ないってわかったときに、とても嬉しい気分になった。明日香には友達が多かった。毎日違う友達が面会に来

る。男女問わず。比較としては、女子の方が多い。でも、男子もしよっちゅう来る。明日香の人气がどれほどのものを物語っているな、と僕は思った。

「ねえ、明日香。やっぱり俺、お前の事好きだよ」

明日香の男友達が出来ていて、僕は少し拗ねるように窓を見ていた時だ。いきなり隣で告白が起こっていた。もちろん、会話から判るようにされてるのは明日香。してるのは、結構カッコイイと分類される男のこ。髪の毛は茶色でピアスをしている。やっぱり気になるから横目で僕は二人を盗み見る。あくまでもばれない様に。

「・・・なんでそんな事、今更、それにいきなり言うの?」

明日香は友達からの告白から少し間をおいて答える。【今更】って事は昔付き合っていたのかな?

「お前が交通事故に遭ったって聞いたとき、俺すごく心配したんだ。なあ、もう一回付き合えないかな?」

「・・・無理だよ」

明日香は断った。その時、自分の全身の筋肉から力が抜けるのが判った。・・・やっぱり僕は明日香の事が好きなのだ。・・・今、やっと実感した。

「なんで!?!」

告白した男は断られると思っていなかったのかもしれない。百戦錬磨って感じだし。

「私、貴方の浮気癖には付いていけない・・・それに私、今好きな人居るの」

「誰だよそれ!」

男は再び声を荒げる。僕は僕で、明日香の好きな人を考えていた。僕がわかるわけないけど。

「貴方には関係ないわ。それにここは病院よ?少し声が大きいんじゃない?」

明日香は冷静に、顔色一つ変えずに答える。

「っ！」

男はそのまま病室を飛び出してしまった。なんだか気分がいいな。
「・・・ねえ、少しビックリした？」

僕の方に向きなおした明日香は少し微笑んでいた。

「少し？ いや、かなりビックリしたよ」

僕も明日香の方を向く。自然と視線が合わさる。

「どう思った？」

明日香は目をずらそうともしない。透き通った目で俺の目を見据える。

「・・・受けないで欲しいと思った」

俺も視線を外さない。外せなかった。

「どうして受けないで欲しいと思ったの？」

明日香の素直な感想。・・・僕も素直に返そうと思った。

「・・・君の事が好きだから」

お互い目を外さない。僕は明日香の目を見つける。綺麗な瞳。明日香の目は僕を捕らえて離さない。明日香には、僕の目がどのように見えているのだろうか？

少しの間がとてつも長く感じる。僕は少し告白した事を後悔し始めた。

「今日は、二回も告白されちゃったな」

「それも二回も断らなきゃならないのは大変だね」

僕はあくまでも冷静に切り返す。実際は後悔が胸の中を満たしていた。

「・・・うつん。二回目は断らないよ」

「——え？」

「だって、二回目に告白してきたのは、私の好きな人だからね」
彼女が笑っている。顔を真っ赤にして笑っている。やっぱり僕もつられて笑う。今日は何か幸せだな。いや、理由は判りきってるけど。

僕達が付き合いはじめて少し経つと、明日香は退院した。僕の方が少し重症なのと、明日香の方が先に病院に来ていたので、当然である。でも僕達は離れ離れにはならなかった。電話番号やメールアドレスはもちろん交換してたし、明日香はまだ、リハビリが必要だったため、病院によく来ていた。僕も明日香のリハビリの時間に合わせてリハビリをした。少しでも明日香と一緒に居たかったからだ。僕自身、こんなに積極的になるとはおもってもみなかった。実際自分で告白したのも驚きものである。

「でね、今日も学校で階段から落ちそうになっちゃんだよあ」

「はは、明日香は間抜けだな。だから交通事故なんか遭っちゃうんだよ」

「むう、それを言うならタケルだって交通事故で入院してるじゃない」

「あ、そっか」

こんなやりとりが続く。これが僕の新しい日常。楽しい日常。手放したくない日常だ。

ある日の昼。僕はリハビリの時間が迫ったことを確認して、病室をでた。

「あ・・・健君」

後ろか女性の声が聞こえたので後ろを振り返る。明日香かな？つと一瞬思ったが違うらしい。でも、どこことなく明日香に似ている雰囲気を感じさせていた。

「えつとあの、どちら様でしょう？」

少し目が腫れていた。おそらくさっきまで泣いていたのだろう。

「・・・私は明日香の母親です。ちょっと一緒に来てもらえませんか？」

「あ、はい」

僕はなんだか嫌な予感を胸に明日香の母親の後ろを歩き始めた。僕の足を気遣ってか、ペースはゆっくりである。

「ここです」

その中の部屋では泣き声が聴こえた。嫌な予感が現実味を帯びてくる。考えたくない・・・そんな考えが僕の中で渦巻く。僕は扉を開けた。そこには・・・

明日香の静かに眠るような・・・遺体があつた。

その後の記憶があまりない。僕は明日香の側に居た。不思議と涙はでなかった。

死因は交通事故で頭部強打。

僕達をめぐり合わせたのは交通事故。僕達を引き裂いたのも交通事故。故。

「明日香。僕は絶対車には乗らないよ」

静かに眠る明日香に僕は、静かにキスをした。

これが僕のファーストキスだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1411a/>

ファーストキス

2010年10月8日15時21分発行